

今週の為替相場見通し(2021年7月5日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		110.42 ~ 111.66	111.01	110.00 ~ 112.00
ユーロ	(ドル)		1.1807 ~ 1.1944	1.1864	1.1750 ~ 1.1950
(1ユーロ=)	(円)		131.30 ~ 132.40	131.75	130.60 ~ 132.60
英ポンド	(ドル)		1.3734 ~ 1.3938	1.3836	1.3600 ~ 1.3850
(1英ポンド=)	(円)	*	152.62 ~ 154.23	153.52	150.00 ~ 155.00
豪ドル	(ドル)		0.7445 ~ 0.7601	0.7524	0.7450 ~ 0.7600
(1豪ドル=)	(円)	*	82.81 ~ 84.19	83.57	82.50 ~ 84.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 甲斐 貴之

(1)今週の予想レンジ: 110.00 ~ 112.00 円

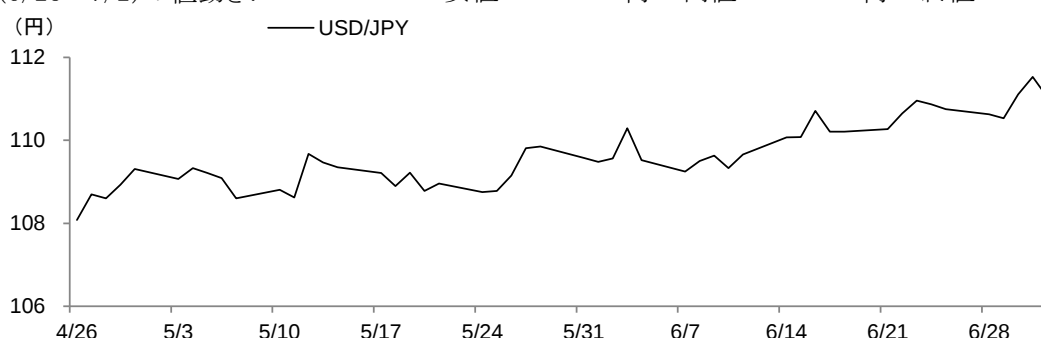
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、先週に続き年初来高値を更新した。週初28日、110.80円付近でオープンしたドル/円は、新規材料難の中、111円手前に迫る場面もあったが、ポジション調整や米金利の低下からドル売りが加速した。110円台半ばまで反落した後は110円台後半での小動きとなった。29日のドル/円は、前日に続いて動意に乏しい展開。終日を通して米金利の動向を睨みながら110円台半ばを中心に値幅30銭程度と狭いレンジでの値動きとなった。30日、月末絡みの売買が交錯し、一時週安値の110.42円まで値を下げたが、その後発表された米6月ADP雇用統計の強い結果に加え、米株の堅調推移を背景にドル買い優勢となり、一時111円半ばまで急伸した。1日、ドル/円は、前日からのドル買いの流れが継続。米主要株価指数や原油価格が堅調に推移をしたことも相まってリスク選好的な雰囲気が高まり、111.64円まで値を切り上げた。2日のドル/円は、連日更新していた年初来高値を再び更新し、111.66円まで上昇。その後は111円半ばで推移し、欧州時間入り後に111.40円まで下落した。米6月雇用統計発表直後に111.60円まで上昇したものの、すぐに反転し111.16円まで下落した。その後、111.30円台まで戻したものの、引けにかけて再び下落し、110.00円台で越週した。

今週のドル/円相場はレンジ相場となりつつも緩やかに円安が進行する展開を予想する。米6月雇用統計では、雇用者数が市場予想を上回ったもの、失業率も市場予想比上振れるなどまちまちだったことで、テーパリング期待がやや後退し、米金利低下となった。週の中ごろにはFOMC議事要旨や、米7月新規失業保険申請件数などが予定されており、良好な内容となれば再びテーパリング期待が高まると思われる。重要指標の発表は6日(火)に米6月ISM非製造業景況指数、7日(水)に米6月MBA住宅ローン申請指数、FOMC議事要旨(6月15-16日開催分)、8日(木)に米7月新規失業保険申請件数、米6月失業保険継続受給者数、9日(金)に米5月卸売在庫の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/25~7/2)の値動き: 安値 110.42 円 高値 111.66 円 終値 111.01 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 天雲 遊也

(1) 今週の予想レンジ: 1.1750 ~ 1.1950 130.60 ~ 132.60 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは軟調推移となった。週初28日1.1940でオープンし、一時週高値である1.1944をつけるも、1.19台前半までじりじりと値を下げる展開に。その後は、買い戻しが入り下落分を取り戻し、一巡後は方向感に欠ける値動きとなった。29日は、米金利上昇を背景にドル買い優勢の展開となったことから1.18台後半まで下落。その後は、じりじりと値を戻し1.19を挟んで揉み合う展開に。30日は、しばらくは1.19を挟んだ小動きとなったが、後半にかけて米6月ADP雇用統計の強い結果や、米株の堅調推移を背景にドル買い優勢となり、約3か月ぶりの安値である1.1845まで下落。1日は、1.1837まで下落する場面もあったが、ユーロ/円が上昇する中1.18台後半まで値を戻す。しかし、その後は米金利上昇を背景としたドル買いに再度下落。2日は、米6月雇用統計の発表を控える中、しばらくは狭いレンジで小動き。注目の雇用統計は農業部門雇用者数変化(NFP)が予想を上回る強い結果となり、ドル買い優勢の展開から一時週安値である1.1807をつける。その後は、ドルが売り戻される展開に1.18台半ば近辺まで値を戻し、1.1864で越週した。

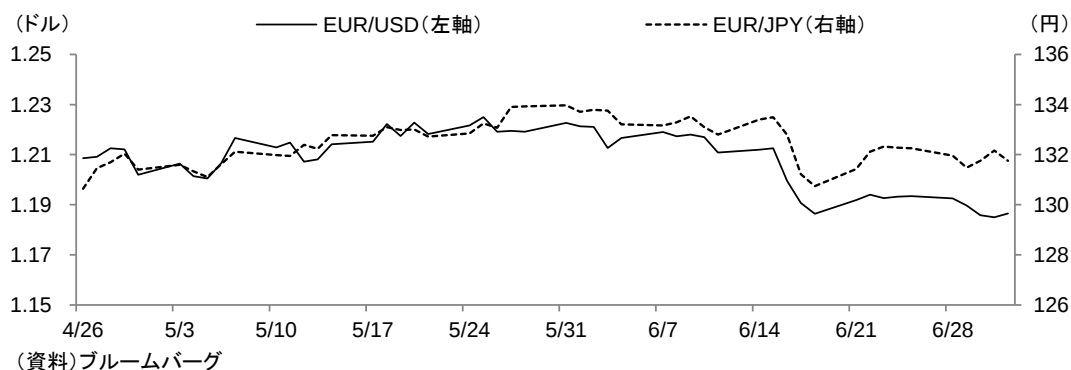
今週のユーロ/ドルは軟調推移を予想。欧州の経済回復期待はあるものの、ECBはPEPP縮小の議論は時期尚早であるとのハト派寄りの発言を繰り返しており、スタンスの維持が確認されている。一方、米国は先週金曜日に発表された6月雇用統計の強い結果もあり、テーパリング期待が高まっている。こうした欧米の政策の方向感の違いを意識してユーロ/ドルは軟調推移となるだろう。また、欧州圏での新型コロナウイルス変異株(デルタ株)感染拡大によって、経済制限への懸念も燃えている点にも警戒したい。経済指標は、5日(月)にユーロ圏サービス業PMI、6日(火)にユーロ圏小売売上高、ユーロ圏ZEW景気期待指数等が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/25~7/2)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1807 高値 1.1944 終値 1.1864

(対円) 安値 131.30 高値 132.40 終値 131.75



3. 英ポンド

欧州資金部 神田史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3600 ~ 1.3850 150.00 ~ 155.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は下落。週初28日は対ドルで1.39台で推移するもドル高を背景に日々下値を切り下げる展開となった。この間、英国発のニュースでポンドに影響を及ぼし得たものとしては、①徐々に上昇している新型コロナウイルス・デルタ株の新規感染者数と②イングランド銀行（英中銀）のペイリー総裁が1日の発言で示した「一時的なインフレ高進に過剰反応すべきではない」という見方が挙げられる。①に関しては、ヨーロッパ大陸の諸国（フランスを除く）に同じような傾向が観測されているが、一日当たりの新規感染件数が2回のロックダウン緩和を経て明確に急増してきている。一時期ポンドが先行するワクチン接種率で選好されていたことに鑑みるにポンド売り材料となる。②については6月会合から舵をとったわけではないものの利上げ期待への牽制ともとれ、米Fedへの金融政策正常化期待との対比で素直にポンドの重しとなったと言える。週末2日のセッションでは米6月雇用統計でドルが上振れた刹那に1.3734まで下げたものの、失業率が予想を上回ったこともありドルがその後下落すると1.38近辺までポンドも買い戻され越週となった。

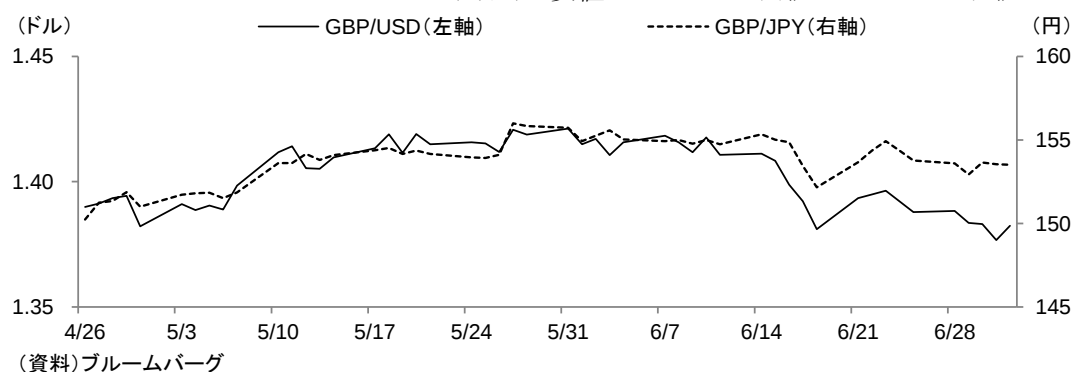
今週のポンドは引き続き上値重い展開を予想。当初予定された6月21日のロックダウン解除が4週間延期された後も上述の通り新規コロナ感染は増加しており、関連ニュースへの関心は高い。現状は英当局からはロックダウン解除は予定通り行われる旨の発言が目立つ。一部報道によると英社製コロナワクチンの一部バッチについて、現在欧州内で進んでいるワクチンパスポートにはカウントされないとEUが決定した、とされる。先の経験から英社製ワクチンのネガティブな話題には英ポンドは下落することが多く短期的に重しとなりうる。またペイリー総裁の上記発言もしばらく対ドルで材料視される可能性は高く、ポンドの継続下落を見る要因となる。テクニカル面では対ドル1.36-37レベルは今年のサポート水準となっており、200日線も1.3650レベルにあるため、この辺りが当面の底値水準となろう。経済指標は5日に6月製造業PMIの確報値、9日に5月GDP（月次）、5月鉱工業生産が発表される。直後の値動きはあるかもしれないが、いずれもトレンドを変えるほどの材料にはならないだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週（6/25～7/2）の値動き:

(対ドル) 安値 1.3734 高値 1.3938 終値 1.3836

(対円) 安値 152.62 高値 154.23 終値 153.52



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 0.7450 ~ 0.7600 82.50 ~ 84.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は年初来安値を更新後、米雇用統計を受けて小反発。週初からシドニーなどの大都市でロックダウンが導入される中、豪ドルは0.75台後半での中心としたもみ合いに終始。一時、0.76台に乗せる場面も見られたが、海外時間にリスク回避の動きが広がると豪ドルは0.75台半ばまで軟化した。翌29日、豪州でのロックダウンの地域拡大が嫌気され、豪株がオープンから大きく下落すると豪ドルも軟調な推移に。海外時間に米ドル買いの動きが強まると、豪ドルは0.75台前半まで下値を切り下げた。30日は、序盤は前日の軟調推移の反動を見せるも、米国時間に米ドルが全面高になる中で豪ドルは0.75台割れとなった。1日、豪5月貿易収支などの指標が発表され、総じて豪州経済の復調が確認されたものの、米6月雇用統計を控えドル買い地合いが継続する中で豪ドルは軟調な推移。2日も米6月雇用統計発表まではドル買い地合いが継続し、豪ドルは年初来安値を断続的に更新。米6月雇用統計は、非農業部門雇用者数が市場予想を上回る結果となり前回分も上方修正。米ドル買いが強まり豪ドルは0.7445まで下落した。しかし、ドル買いの勢いは続かず豪ドルにも買戻しが入る中で0.75台前半まで反発し、同水準で越週している。

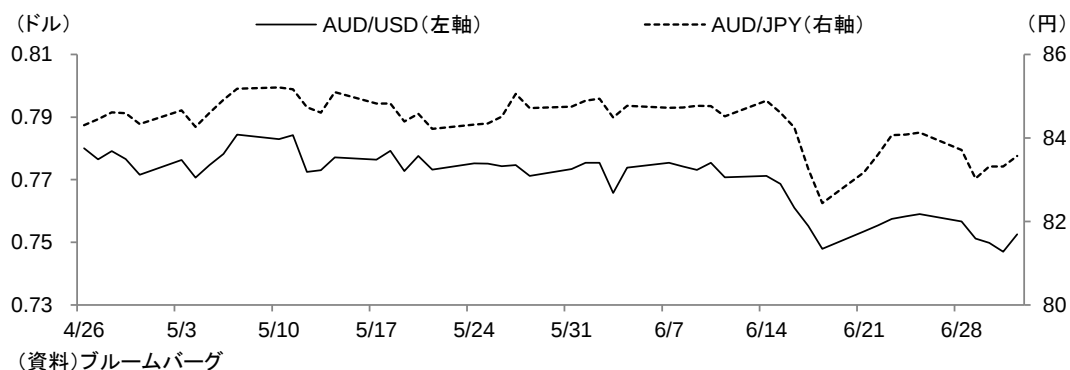
今週の豪ドルは動意薄の展開を予想する。豪ドル相場は米ドル主導での推移が続いている。米6月雇用統計では非農業部門雇用者数が+85万人増加(予想+72万人)となり、前回分も上方修正がされた。加えて、不完全雇用率は15か月ぶりの水準まで低下している。一方で、失業率は悪化し、平均時給の伸びも鈍化。失業率の悪化については職探しなどの増加の影響との見方もあり悲観的な材料とは言い切れないが、過度な期待が高まっていたのか、雇用統計後のドルは売り優勢の地合いとなっている。米発の経済イベントを消化し、今週は7/6に豪中銀理事会が予定されているが無風との公算が大きく相場に与える影響は限定的であると考えている。また、豪ドルの現状水準は、0.76台前半(6/25)と0.74台半ば(7/2)の半値戻しの水準。それらを踏まえると0.75台前半を中心としたもみ合い推移になるのでは。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/25~7/2)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7445 高値 0.7601 終値 0.7524

(対円) 安値 82.81 高値 84.19 終値 83.57



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。